巡礼の道 656

藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

来年に希望を託して
～令和元年を終えるに当たり～

「喪中につき年始のご挨拶を失礼させていただきます」という葉書が届く。

私も来年80歳になるのだから、喪中葉書が届くのは当然のことかもしれない。

80歳を節目に賀状を出すのを止めることに決め、最後の賀状書きもやっと終わった。これで新しい年、令和2年を迎える準備がほぼ出来た。

形式的な賀状、この伝統も悪いものではないが、もうあまり形式的なものにこだわる年齢でもない。

私たちは伝統と形式の中に生きている。キリスト者にとって今年の大イベント、フランシスコ教皇の来日のことを思い出しながら、伝統について考える。

イエス・キリストの弟子ペトロから数えて266代目に当たる現教皇。そこには形式と伝統が共存している。

先日、下松教会の原田神父の黙想会で「マタイ福音書」を中心に聖書の大きな流れについて学んだ。原田神父いわく「聖書は知れば知るほど面白い」と。

聖書は神が書かれたものではない。神の意志を人を通して伝えたものだ。話を聞いていると、それが過去の物語ではなく色んな形となって今の自分の生活の中に生きていることがわかる。年賀状などのもととなった暦にしてもしかり。

私の霊名でもあるアウグスティヌス。中世最大の教父といわれるアウグスティヌス皇帝から西暦が始まる。そのほか、セム族の文章の元になった数々の数字。聞いていて驚きと共にかくも聖書が今の自分の生活に生きていることが分かり確かに面白い。と同時に自分が如何に無知であるかも自覚させられた。

こんなことを書いていたら令和2年を迎える時までの時間はなくなるので、この辺で止めよう。

来年の私の最大の希望は、ラオスを訪れること。比較的近いのに訪れたことがない「ラオス」に行きたいと思っている。旅はまず、自分がぜひ行ってみたいという希望を持つことから始まる。

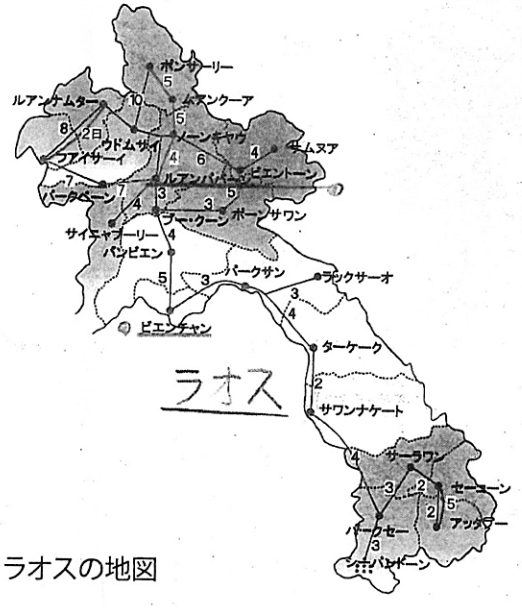
今まではそれが不思議に成就しているのだから「希望」を持つことから始めたい。

南北に細長い国ラオス。何度かラオスに行った長女の話によると、まだ日本人にはあまり知られていない秘境のような一面とともに、今も共産圏なのだ。南端の首都ビエンチャンよりも、かつての首都であったルアンパバーンの方がフランス領の植民地下だった面影を残し、美しい街だそうだ。

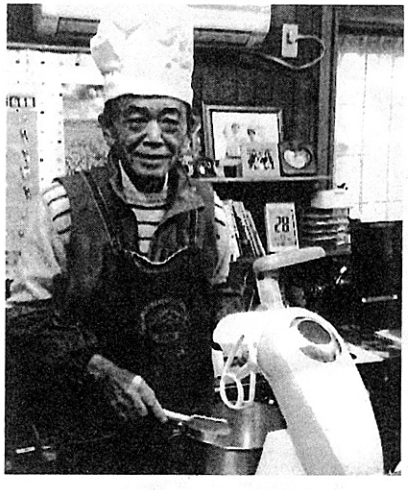
ラオスに行きたいという希望は持った。これからそのために体調を整えて令和2年を迎えること。そして年賀状書きが終わったので、今年の残り時間、これからの1週間は自慢のケーキ造りに打ち込むつもりである。こちらも写真でお分かりにように形の準備は整っている。

ただ一つ心残りだったこの巡礼の道のホームページが、手伝ってくれた青年の入院で中途半端になっていたが、新聞社のお陰でこれも目鼻がついた。過去の巡礼の道も「フジヤカンジ」で検索して読んでいただければ嬉しい。この1年愛読して下さった皆様がよい新年を迎えられるように祈りつつ、令和元年、最後の原稿のペンを置く。

熱心に聖書について話す原田神父



ラオスの地図



ケーキを焼く